『捷解新語』における対訳・音注の配置について

趙　來喆

キーワード：対訳、音注、真横表記、ずらし表記、日本語学習書

要　旨

本稿は、『捷解新語』改修本におけるハングルの対訳と音注の配置を中心に調査・考察を行ったものである。それによって、朝鮮語による対訳の配置とはちがって、ハングル音注の場合は基本的に日本語本文とハングル音注とが一対一の相対の形式を取っていることが指摘できる。一方、促音、撥音、拗音、舌内入声音(閉音節)などの場合には日本語本文に対してハングル音注が一対一の相対(真横表記)ではなく、二対一、または三対一の相対(ずらし表記)で示され、ハングル音注が日本語本文の仮名と仮名のあいだにずらして表記されるのが一般的であることが分かる。これは『捷解新語』が外国人のための日本語学習書という性格から、朝鮮語の音韻体系及びハングルの表記原理になじんだ朝鮮人学習者に日本語の正しい発音を学習させようと音注の配置を工夫した結果であると解釈される。

0.　はじめに

『捷解新語』は朝鮮における司訳院の日本語学習書で、日本語本文(平仮名)の他に朝鮮語による対訳と音注が施されており、早くから日本語や朝鮮語の言語資料として多岐にわたって取り上げられている。また、原刊本(1676)から改修本(1748)、重刊本(1781)へと改訂が行われるなか、対訳の位置や配置という形式的な面にまで改修が行われていたことが指摘されている[*1]。具体的に述べると、原刊本では日本語の一文(句)ごとに割り注で対応するハングル対訳を付すのに対し、改修本、重刊本では日本語の左側に語や文節ごとに対応するハングル対訳を配置させている。一

*1　辻星児(1997b, p. 153以下)参照。

方、ハングル音注の配置は原刊本から重刊本にかけて改訂が行われても、音注の配置には大きな変化が見られない。即ち、朝鮮語による対訳の配置とはちがって、ハングル音注の場合は基本的に日本語本文の一文字に対してハングル音注一文字という一対一の相対*2の形式を取っている。しかし、音注の配置はすべて統一されているとは限らない。例えば、促音、撥音、拗音、舌内入声音(閉音節)などの場合には日本語本文に対してハングル音注が一対一の相対関係ではなく、一般的に平仮名と平仮名のあいだにずらして表記する傾向が見られる。

①「促音、撥音、拗音」の対訳・音注の配置例

音注	일	세	쯔	다	이	관		슈	몬
日本語本文	い	つ	せ	つ	た	い	く わ ん	し ゆ	も ん
対訳	一	切		代		官		守	門

(下線は筆者注、以下同様)

上記のように、朝鮮語の対訳と音注が日本語本文に真横表記されている場合(①の日本語本文「せつ」「たい」に対する対訳、音注)とずらし表記されている場合(①の下線部の対訳、音注)がある。また、巻十に見られる舌内入声音(閉音節)の場合にも、対訳と音注の配置が日本語本文に対してずらし表記の例が見られる。そこで、本稿では『捷解新語』改修本における朝鮮語による対訳と音注の配置の用い方について巻別に調査・考察を行うとともに、日本語本文に対するハングル音注の配置において真横表記の例とずらし表記の例を検討してみる。それによって、『捷解新語』における音注の配置は、日本語の正しい発音を学習させようとする日本語学習書としての試みによるものであることを明らかにする。

*2 辻星児(前掲注*1)では、「相対」(真横への配置を「相対」と名付け、「対応」と区別する)という用語が用いられており、日本語本文に対する対訳が、多少、上下にずれた場合も含める。しかし、本稿では日本語本文に対するハングル音注・対訳が真横にあるか、ずらしてあるかをも問題とするため、日本語本文に対する音注・対訳が一対一の相対の場合は「真横表記」とし、二対一、三対一の相対(日本語本文の仮名と仮名とのあいだに音注・対訳が施されている)の場合は「ずらし表記」とする。

1. 先行研究

濱田(1970)では、『捷解新語』における朝鮮語と日本語との間の対訳について、「同じ内容を表すべき「語」が、左右のページのほぼ同じ場所に現れる」ことが可能であるとしている。特に、重刊改修本(本稿の重刊本)では「朝鮮語は、日本語のすぐ左側に、それぞれの「語」に対するひきあてがなされて、真の意味での「対訳」と云える形を採っている」としている[*3]。また、辻(1997b)では、『捷解新語』改修本における日本語本文と朝鮮語対訳との配置関係を中心に調べ、以下のようにまとめている。「日本語の体言その他に助詞類(格助詞・副助詞・係助詞など)が付属している場合、一般的に、日本語の助詞に対応する朝鮮語の助詞は相対させている」とする。また、この中には相対しない例も見られるとし、「この場合には、朝鮮語の助詞は、上接語と連続して1文節として表記されている」[*4]と述べ、日本語本文に対する朝鮮語対訳の配置を検討することによって、両言語の構造に対する文法意識、文法分析に関わる問題を探ることができるとしている。その具体的な内容は、以下のようである。(辻(1997b, p. 153)以下参照)

(1)体言：日本語の体言には、それに対応する朝鮮語を相対させることを原則としている。
(2)格助詞・副助詞・係助詞類：日本語の体言その他に助詞類(格助詞・副助詞・係助詞など)が付属している場合、一般的に日本語の助詞に対応する朝鮮語の助詞は相対させている。
(3)用言複合体：日本語の用言複合体の文節には、対応する朝鮮語の用言複合体の

---

*3 濱田(1970, pp. 44-45)参照。その他、安田(1966, p. 477)でも、第二次改修本(本稿の重刊本)における朝鮮語と日本語との対訳について「文法的構造の酷似から来る構文の共通性から、まさに対訳、translation side by side with the original に価する体裁を採った」との指摘があるが、どちらも音注の配置については述べられていない。

*4 辻星児(1997b, pp. 156-157)参照。少数ではあるが、助詞類のうち相対しない例の現れやすい条件として、以下のような例を挙げている。
a)朝鮮語の助詞‘ㅣ’が母音終わりの体言に付く場合や助詞‘의’が体言末音節と融合した場合、b)対訳が動名詞語尾‘ㅁ’＋助詞の場合(例えば‘미’)、c)朝鮮語が「用言＋語尾」で対訳されている場合(例えば‘메’)。

文節を一括して相対させていることが多い。

(4)接続助詞：日本語の接続助詞に対応する朝鮮語の要素は、いわゆる接続語尾であるが、この接続助詞と接続語尾を相対させていない例は多い。

(5)複合体内部での相対：日本語の用言複合体を構成する助動詞についても、対応する朝鮮語の形式を時に相対させていることがある。

(6)補助動詞：補助動詞はその接続の種類によって、相対の率が異なるが、平均して6割程度の相対率を示している。

さらに、「重刊本では、改修本の方式を踏襲するが、相対をより厳密なものとしている」とし、改修本ではほとんど相対させていなかった日本語の用言複合体の接続助詞、終止語尾もほぼ規則的に相対させているとしている。

一方、日本語本文に対する音注の配置については、これまでほとんど言及されていない。安田(1980)においても、重刊本の仮名本文とハングル音注に朱の円が施されているという指摘にとどまっている。

> 勿論刊行後のことであろうが、円(10.5粍)が、朱で、仮名本文と音注諺文に施こされている。仮名本文のは、「や」・「ゆ」・「よ」・「わ」を添えた拗音節と撥音節との表記、換言すれば、その殆んどは、先に述べた連字が用いられている個所および、促音「つ」・「く」と直前の音節との中間に、記されている。
>
> (安田(1980, p. 103))

このように、これまで日本語本文の左側に施されている朝鮮語対訳の配置については、具体的に取りあげられてきているのに対して、日本語本文の右側に施されているハングル音注の配置についてはほとんど論じられていないのが現状である。そこで、以下では朝鮮語対訳とハングル音注の配置について探ってみることにする[*5]。

2. 対訳・音注の配置

朝鮮語対訳は日本語本文の左側(本稿では下段、以下同様)に語や文節ごとにハン

*5 日本語本文に対するハングル音注の配置原理の詳細については、稿を改めて述べることにする。

グルと漢字をもって施されているのに対して、音注は日本語本文の右側(本稿では上段、以下同様)に基本的に一対一の相対(真横音注)でハングル表記が用いられている。

②対訳・音注の配置例

나 닝 가 시 고 고 에 고 이 소 나 다 다 이 관
なにかし ここゑ こい そなた たい くわん
아모가히 이러 오라 네 代 官

쥬 우 에 읜 데 와 레 와 레 노 구 쇼 우 까 라
ちう ゑ いつて われわれの くしやう から
中 에 가 내 전갈 로

(巻一 1オ)[*6]

上記②の例のように、朝鮮語による対訳の場合は日本語本文の語頭に合わせただけで、必ずしも日本語本文に対して均等に配置されていないのに対して、音注の場合は基本的に日本語本文に対して均等に配置されている。その理由は、対訳と音注の目的の違いによるものであろう。つまり、対訳は日本語本文の意味を把握することを目的としているのに対して、音注は日本語本文の仮名の音を正確に読むことを目的としているため、日本語本文に対する音注が均等に配置されているのであろう。但し、必ずしも音注が日本語本文に対して均等配置になっているのではなく、上で述べたように、促音、撥音、拗音、舌内入声音(閉音節)などの場合は日本語本文の上下にずらして配置されている。それは、二文字、三文字の日本語本文を読み間違えないようにするためであろう。即ち、②の「たいくわん」は ta-i-ku-wa-un[*7]ではなくて ta-i-koan であることを、「いつて」は i-ccu-tyəi ではなくて it-tyəi であることを、「くしやう」は ku-zi-ya-u ではなくて ku-zyo-u であることを示すため、ハングル音注が日本語本文の仮名と仮名との間に施されていたことが考えられる。

一方、漢字をもって対訳する場合は日本語本文に対して対訳の漢字一文字一文字を配置させる方法が用いられている。辻(1997b)では、「二字漢語や合成語の場合は、

*6 特記しない限り、改修本の用例である。

*7 ハングルのローマ字表記は、主に河野六郎(1994)を参考する。

その構成要素の対応する漢字や朝鮮語を相対させている」とし、「「くんくわん」:「軍官」のように、漢字をもって対訳している場合、日本語に対応する部分に漢字一字ずつ相対させる」とする。そこで、対訳と音注の配置関係を的確に調べるため、日本語の固有語を漢字表記した例(例えば、「あちらこちら」(彼此)など)は対象外とし、漢字をもって対訳される場合に限って考察を行うことにする。また、辻(1997b)の指摘は、漢字をもって対訳する場合、日本語本文に漢字を一字ずつ相対させているというものであり、それ以上の踏みこんだ考察がない。本稿では、日本語本文に対して対訳・音注の配置が真横に配置されるか、上下にずらして配置されるかを調べ、日本語本文に対する対訳・音注の配置が真横に施されているいる場合を「真横対訳」「真横音注」、対訳・音注の配置がずらして施されているいる場合を「ずらし対訳」「ずらし音注」と呼び、日本語本文に対する対訳・音注の配置関係を緻密に検討してみる。

3. 対訳・音注の配置の実態

3.1. 「真横対訳」「真横音注」の場合

「巻一」③쇼 우 가 이
せ う か い
捷 解 (1オ)

<類例>

たいいつ(第一 1オ)、ろし(路次 1ウ)、とうたう(同道 3オ)、
そさ(送使 6ウ,7オ,43オ)、ふてうはう(不調法 8ウ)、ふし(無事 15ウ)、
とかい(渡海 17オ,32ウ)、あくふう(悪風 19オ)、すいふ(水夫 19オ)、
とうらい(東萊 20ウ,30オ,32オ,37オ,38ウ,39ウ,49オ,50オ)、
はうはう(方方 20ウ)、へち(別 23ウ)、せいめい(姓名 24ウ)、
つう(通 28オ,29オ)、ようす(様子 30ウ)、さくしつ(昨日 32ウ)、
つうし(通事 35オ)、いちや(一夜 36ウ)、さいもく(材木 37オ)、
されい(茶禮 39オ,40ウ,44ウ)

「真横対訳」「真横音注」のように、対訳・音注の配置がともに日本語本文の真横に施される場合は、開音節や長音の漢語の例がほとんどである。即ち、③「せうかい(捷解)」のように、日本語本文(平仮名)の右側に音注が一字ずつ相対し、また漢字一字に当たるところの一文字目の左側の真横に対訳が配置される。これは、「巻

二」から「巻十」までの開音節や長音の例についても同様のことがいえる。

3.2. 「ずらし対訳」「真横音注」の場合

「巻一」④仝　사
　　そ　さ
　　送使　(10オ,30ウ)
　<類例>
　　きとく(奇特 10オ)
「巻二」　ふし　(無事 2オ)
「巻四」　たうり(道理 4オ)
「巻六」　せいしん(聖信 3ウ)
「巻八」　ふきやう(奉行 1オ)
　　(下線部は、代表例と同じ配置であることを示す。以下同様)

「巻四」⑤고　우　모　구
　　こ　う　も　く
　　公　　木　(9オ,13ウ,14オ,15オ,15ウ)
　<類例>
　　いつそう(一隻(ママ) 10ウ(2例))、さんそう(三隻(ママ) 11オ,11ウ)
　　そうもつ(雑物 34ウ)

3.1で見てきたように、開音節や長音は「真横対訳」「真横音注」の配置が一般的であるが、例外的に④⑤の「ずらし対訳」「真横音注」の配置の例も見られる。

「ずらし対訳」「真横音注」の例のうち、④は日本語本文に対して音注が真横に配置されているが、対訳は日本語本文の一文字目のところから詰めた形となっており、日本語本文に対して対訳の漢字の配置がずれている例である。これらの例を全体の用例数と比べてみると、「送使」8例のうち2例、「奇特」3例のうち1例、「無事」23例のうち1例、「道理」9例のうち1例、「聖信」7例のうち1例、「奉行」13例のうち1例が「ずらし対訳」「真横音注」の配置になっている。また、これらの例の中で「奇特」(巻九 20ウ)、「無事」(巻一 10オ)の例は、朝鮮語による対訳も一例ずつ用いられており、他の朝鮮語対訳と同じように日本語本文の一文字目のところから文字を詰めて配置する方法を取っている。

⑤は「公木」の「木」のように、日本語本文に対して音注が真横に配置されてい

るが、対訳は日本語本文の仮名と仮名の中間の部分に配置されている例である。これらの例を全体の用例数と比べてみると、「公木」26例のうち5例、「一隻(艘)」6例のうち2例、「三隻」2例のうち2例、「雑物」7例のうち1例(残りの6例は「さうもつ」)が「ずらし対訳」「真横音注」となっており、全体の用例数からみて「ずらし対訳」「真横音注」の数が少ないことが分かる。但し、ここで注意しなければならないことは、⑤と同じ漢語の例が他の巻にも見られるが、「ずらし対訳」「真横音注」の配置になっている例は巻四にしか見られないことである。開音節や長音が「真横対訳」「真横音注」の配置になっている例が全巻にかけて見られるのに対して、⑤のような例が巻四にのみ集中して見られるのは、編集時の誤りあるいは巻四の別筆の可能性が考えられる。④⑤のような例は全て重刊本において「真横対訳」「真横音注」の配置へと改められており、開音節や長音などにおける対訳・音注は基本的に「真横対訳」「真横音注」の配置となっている。

3.3. 「ずらし対訳」「ずらし音注」の場合

「巻一」⑥ 令　　몬

　　し　ゆ　も　ん

　　守　　門 (2オ)

<類例>

たいくわん(代官 1オ,3オ,9ウ,13オ)、はんし(真事 4ウ,7オ)、
あんしん(安心 6ウ)、こんにち(今日 8オ,16ウ,18オ)、ひん(便 11オ)、
たいめん(對面 10オ)、にとくそうし(二特送使 11オ,14オ,14ウ)、
ふさん(釜山 12ウ,20ウ,24ウ,30オ)、ゆたん(油断 13オ)、
しよかん(書簡 13オ,23オ,24オ,25オ,25ウ)、あんない(案内 13ウ)、
たうねんてう(當年条 14ウ)、たいせん(大船 19オ)、
みやうにち(明日 18ウ,21オ,23ウ,40ウ,42ウ,43ウ,49ウ)、
しやうくわん(正官 21ウ,34オ,34ウ,41オ,43オ,43ウ,44オ,44ウ,46オ,46ウ)、しやうたい(正體 22ウ)、とうせんちう(都船主 22オ)、
ふうしん(封進 22オ,22ウ)、ちうしん(註進 24ウ,30オ)、
御しゆ(御酒 26ウ)、しやうこ(上戸 27オ)、しんしやく(斟酌 27オ)、
みやうてう(明朝 30オ)、ひやう(病 39ウ,43オ,46ウ,47ウ)、
にうくわん(入館 31オ)、くんくわん(軍官 33オ,33ウ)、ねん(念 31ウ)、
かんにん(堪忍 36ウ)、ひやうしん(病身 41オ)、しよくし(食事 41ウ)、
さんし(暫時 44ウ)、さくはん(昨晩 46オ)、きしよく(気色 47オ)、

きやくしん(客人 48ウ)、ていしゆ(亭主 48ウ)、
やうしやう(養性 50ウ)、こんや(今夜 50ウ)

開音節や長音は、対訳・音注の配置が基本的に「真横対訳」「真横音注」であるのに対して、⑥のような例は対訳・音注ともに日本語本文の仮名と仮名との中間部分にずらして配置させた「ずらし対訳」「ずらし音注」の例で、これには促音、撥音、拗音、舌内入声音(巻十の閉音節)などがある。これらの例は、「巻二」から「巻十上」までの例についても、上記の「巻一」と同様の配置方法が用いられている。

これは重刊本の巻末にある「伊呂波吐字」「伊呂波合字」の撥音、拗音などが他の仮名の下に連ねてあることや仮名本文の撥音節、拗音節の連字が用いられている個所及び、促音「つ」「く」と直前の音節との中間に、朱円が記されていることとも関連しているものと思われる[*8]。

その他、撥音の場合においても、例外的に対訳・音注がともに日本語本文の真横に配置されている例が見られる。

「巻八」　しゆつせん(出船 14ウ,34オ)
「巻十上」まんまん(萬萬 4ウ,18ウ)
　　さうはん(早飯 9オ)

一方、巻十(特に、十中、十下)の例は、巻一から巻九までの配置の方法とは異なっている。巻一から巻九までの促音、撥音、拗音の例は対訳や音注が日本語本文の仮名と仮名との間にずらして表記される「ずらし対訳」「ずらし音注」が一般的であるが、巻十の例においては「真横対訳」「ずらし音注」の配置方法が一般に用いられている(3.4参照)。

3.4. 「真横対訳」「ずらし音注」の場合

3.3で見てきたように、促音、撥音、拗音などの例は一般的に「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置の方法が用いられるのに対して、⑦のように「真横対訳」「ずら

*8　安田章(1980、pp.103-104)参照。「促・撥・拗音節以外に、仮名本文中で、朱円は見られない点から推すと、仮名表記の上で、これらを、特に他と区別しようとしたのであろう」との指摘がある。

し音注」が用いられる場合がある。

「巻一」⑦ 신　고
　　し　ん　こ
　　新　　語 (1オ)

<類例>

すいほくせん(水木船16ウ)

「巻五」 しんす(信使 33ウ)、さんし(三使 35オ)

「巻六」 しやうけ(上下 5オ)、ちや(茶 9オ)、いんきん(墨墨 15ウ)、
しゆつせん(出船 15ウ,18オ,19オ,20オ,23オ)、
はんし(萬事 21オ,34ウ)、せつたい(接待 21ウ,23ウ,24ウ)、
しんし(信使 25ウ)

「巻七」 しんこ(新語 1オ)、しつち(七 1オ)

「巻八」 たいしゆ(太守 11オ)、さいせん(在前 11ウ)、
さんし(三使 18ウ)、しゆつせん(出船 31オ)

「巻九」 はんし(萬事 20オ)、しよりやう(所領 31オ)、ちくせん(筑前 38ウ)

「巻十上」しんこ(新語 1オ)、けいしやう(啓上 1オ)、さくはん(昨晩 1オ,5ウ)、
ゑんいん(延引 2オ)、さんしやう(参上 2ウ)、こんさつ(個札 13オ)、
いつひつ(一筆 14ウ)、はいけん(拝見 16ウ)

「巻十中」しんこ(新語 1オ)、せんこく(先刻 1オ)、しよちやう(書状 1オ)、
あいたつし(相達し 1オ)、ふうしん(封進 1ウ,3ウ,4ウ,10オ,11オ)、
ゑんせき(宴席 1ウ,3ウ,7オ)、こさんにち(五三日 1ウ)、
ふさん(釜山 2オ,4オ,5オ,10オ)、にさんにち(二三日 2ウ)、
いこん(遺恨 3オ)、こんてう(今朝 3オ,9ウ)、りやうと(両度 3ウ)、
はいけん(拝見 3ウ)、りやうしよ(両所 4オ)、へんし(返事 4ウ)、
きふん(気分 5オ)、りやうにち(両日 5ウ)、やうしやう(養性 5ウ)、
御らん(御覧 6ウ)、せつせつ(切切 7オ)、ちやうたい(頂戴 7オ)、
すいふん(随分 8ウ)、てんき(天気 9オ,11ウ,13ウ)、
せいてん(晴天 9ウ)、たいくわんしゆ(大官来 10ウ)、
ちうしん(註進 12ウ)、しよちう(書中 12ウ)、しめん(紙面 13オ)、
そん(在 14オ,17ウ,21ウ)、こんにち(今日 14オ)、きめん(貴面 15ウ)、
すいさつし(推察し 14ウ)、そのせつつ(其節 15オ)、
あんない(案内 15ウ)、にほん(日本 15ウ,17オ)、きかん(貴翰 17オ)、

はいしゅ(拝受 17オ)、ねん(念 17ウ)、たん(段 17ウ)、ひん(便 18ウ)、
こんみやうにち(今明日 19オ)、たふん(多分 19ウ)、はん(晩 20オ)、
ちやくかん(着岸 20ウ)、せんいち(専一 21オ)、
くわんちやく(館着 21ウ)、にうくわん(入館 22オ,23ウ,26ウ)、
すいきよ(吹嘘 22ウ)、こんまん(今晩 24オ)、きぇつ(喜悦 24オ)、
たいみやうしゅ(大名衆 25ウ)、みやうにち(明日 26オ)

「巻十下」しんこ(新語 1オ)、いつしよ(一書 1オ)、けいたつ(啓達 1オ)、
こんねんふん(今年分 1ウ)、きよねん(去年 1ウ)、みしゅ(未収 1ウ)、
みやうにち(明日 2オ,3ウ,16オ,17オ,18ウ)、
あきうとしゅ(商人衆 2ウ,7オ)、たん(段 3オ)、いつきん(一斤 3ウ)、
そん(存 3オ,5オ,9ウ,15オ,18ウ,19オ)、ふしん(不審 5オ)、
さんはんきん(三斤斤 6ウ)、しよたいくわん(諸大官 7オ,15ウ)、
たんかう(談合 7ウ)、みやうてう(明朝 8ウ)、さうたん(相談 9オ)、
いつさくしつ(一昨日 9ウ)、ほんまう(本望 9ウ)、
たいいつせん(第一船 10オ)、すいもくせん(水木船 10オ)、
いつそう(一艘 10オ,10ウ)、にかうせん(二號船 10ウ)、
しつそく(十束 11オ)、ひやくひやう(百俵 11オ)、
こんみやうにち(今明日 11オ)、ゆたん(油断 12オ)、
めんはい(面拝 12ウ)、そんしよ(尊書 12ウ)、
はいけん(拝見 12ウ,17オ)、かくくわん(各官 13ウ)、
いちぇん(一圓 13ウ)、いつそく(一束 14オ)、くわんちう(館中 15ウ)、
とせん(徒然 15ウ,17ウ)、せつしや(攝者 16オ)、しふん(時分 16ウ)、
あんない(案内 17オ)、きかん(貴翰 17オ)、いちたん(一段 17ウ)、
さんくわい(参會 18ウ)、やせん(夜前 19オ,21ウ)、
いつひつ(一筆 20オ)、しゅしゅ(種種 20オ)、れいちやう(禮状 21オ)、
へんし(返事 22オ)、ほんい(本意 22ウ)、めんしやう(面上 22ウ)、
まんまん(萬萬 22ウ)

促音、撥音、拗音などは「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置が一般的であるが、以上のように、「真横対訳」「ずらし音注」の配置の例も多々見られる。そのうち、本節で取りあげる「真横対訳」「ずらし音注」の配置は、巻一～巻九と巻十とで異質である。

まず、巻一から巻九までの例のうち、主な「真横対訳」「ずらし音注」の例を全

体の用例数と比べてみると、「信使」30例のうち2例、「三使」10例のうち2例、「墨勲」6例のうち1例、「出船」14例のうち5例、「真事」8例のうち3例、「接待」6例のうち3例として、促音、撥音、拗音の多くの例は「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置であることが分かる。ただ、巻六には「出船」14例のうち5例と、「接待」6例のうち3例のすべての例が「真横対訳」「ずらし音注」として配置されており、巻によって対訳の配置に偏りがあったことがうかがえる。

また、巻十の例のうち、「巻十上」の場合は「真横対訳」「ずらし音注」の例が散発的に見られるのに対して、「巻十中」においては「りやうにち(両日 15オ)」「にうくわん(入館 15オ)」の2例の他には、すべての例が「真横対訳」「ずらし音注」の配置になっている。さらに、「巻十下」になるとすべての例に例外なく「真横対訳」「ずらし音注」という配置方法が用いられている。

対訳の配置において促音、撥音、拗音の多くの例に巻一～巻九では「ずらし対訳」、巻十では「真横対訳」が用いられている。このように、巻一～巻九に対して巻十のみが対訳配置にズレが見られることから、巻十が別筆である可能性が考えられる。

その他、「真横対訳」「ずらし音注」の例外的な例を取りあげると、以下のようである。

＊ 日本語本文と読みが異なる例
「巻六」　しやへつ(差別 27ウ)
「巻九」　りやうけん(思見 19ウ)
＊ 促音としてとらえられた例
「巻十中」そくさい(息災(sok-sa-i) 24ウ)
「巻十下」とくそう(特送(tok-so-u) 10オ)
　　かくくわん(各官(kak-koan) 13ウ)
＊ 紙面の都合により字詰めになっている例
「巻六」　いんきん(墨勲 7オ)
「巻七」　ににん(二人 14オ)

重刊本へと改訂される過程において、改修本巻一～巻九の「真横対訳」「ずらし音注」の例は、ほとんどの例が「ずらし対訳」「ずらし音注」へと改められることになる。また、改修本巻十の「真横対訳」「ずらし音注」の例も重刊本において「ずらし対訳」「ずらし音注」へと書き改められることになるが、まだいくつか例外が見られる。そのほとんどの例は「しやう(上)」「ちやう(状)」「りやう(両)」「みや

う(明)」のような拗音の例と、その他「けいたつ(啓達、十上 12オ)」「すいふん(随分、十中 7オ)」「あんない(案内、十中 13ウ)」などの例である。

4. 舌内入声音の対訳・音注について

中古漢語の舌内入声音は、キリシタン資料のローマ字表記があらわすように中世末期まで-t が保たれていたとされるが、朝鮮資料のハングル表記においては開音節化をあらわす表記が用いられている。そこで、本節では、『捷解新語』における舌内入声音の対訳・音注の配置を調べ、舌内入声音がどのように読まれていたかを見てみることにする。『捷解新語』における舌内入声音は、巻一～巻九ではすべての刊本が3.1でみた③の開音節のように「真横対訳」「真横音注」の配置になっている。それに対して、巻十(閉音節)では3.3でみた⑥の促音、撥音、拗音のように「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置になっているのが一般的である。即ち、舌内入声音の場合でも開音節であるか閉音節であるかによって、対訳や音注の配置が異なっていたことが明らかである。但し、改修本における巻十の対訳の場合、促音、撥音、拗音に「真横対訳」「ずらし音注」の配置方法が用いられており、改修本巻十における対訳の配置については例外として考えなければならない(3.4参照)。

以下に、巻十の舌内入声音の例をいくつか取り上げる。

「原刊本巻十」	기 살	곤 살	다 빋 주
	きさつ	こんさつ	たひつ
	(貴札)*9	(個札)	(多筆)
「改修本巻十上」	기 살	곤 살	다 빋 즈
	きさつ	こんさつ	たひつつ
	貴札	個札	多筆
「重刊本巻十上」	기 사 쯔	곤 살	다 힏 즈
	きさつ	こんさつ	たひつつ
	貴札	個札	多筆

*9 原刊本の( )内の対訳は、本来は日本語本文中に割り注になっているものである。

以上の例からも分かるように、舌内入声音「貴札」の音注の場合、原刊本と改修本では閉音節の形「삳」(sat)として「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置になっているが、重刊本では開音節の形「사ㅉ」(sa-ccɯ)として「真横対訳」「真横音注」の配置になっている。このように、舌内入声音の中でも閉音節であるか開音節であるかによって、対訳と音注の配置が異なっていたようである。言い換えれば、『捷解新語』における舌内入声音は対訳と音注の配置によって、主に巻一～巻九に見られる「ㅉ」(ccɯ)は開音節として、巻十に見られる「-ㄷ」(t)は促音、撥音、拗音のように閉音として発音されていたことがうかがえる。

5. 結論及び今後の課題

以上、『捷解新語』改修本における漢語の対訳・音注の配置の実態について検討した結果、語によって対訳と音注の配置の違いが見られる場合(a, b)と、巻によって対訳と音注の配置の違いが見られる場合(c, d)があることが分かった。

a. 開音節、長音の場合：「真横対訳」「真横音注」
b. 促音、撥音、拗音、舌内入声音(閉音節)の場合：「ずらし対訳」「ずらし音注」
c. 開音節、長音は全巻にかけて「真横対訳」「真横音注」の配置であるのに対して、⑤の「ずらし対訳」「真横音注」の配置例が巻四にのみ集中して見られる。
d. 促音、撥音、拗音の多くの例は「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置であるのに対して、「出船」14例のうち5例と「接待」6例のうち3例が巻六でのみ「真横対訳」「ずらし音注」として配置されている。また、巻十の例のうち、「巻十上」の場合は「真横対訳」「ずらし音注」の例が散発的に見られるのに対して、「巻十中」では2例を除いた全ての例が「真横対訳」「ずらし音注」として配置されている。また、「巻十下」では全ての例が例外なく「真横対訳」「ずらし音注」として配置されている。

一方、和語の音注配置についても、以上の漢語の例と同様に和語の促音、撥音、拗音などの例は日本語本文の仮名と仮名の中間部分に規範的に「ずらし音注」が用いられており(《資料》参照)、その他の例は仮名の真横に音注される「真横音注」が一般的である。このように、漢語や和語における音注の配置には規範性、統一性が見られ、重刊本へと改訂されても対訳・音注の配置が厳密に施されているという

ことは、編者の意識の中で日本語の学習者が日本語本文の仮名を読むときに間違いがないようにし、日本語の正しい発音を学習させようとする目的があったためであると考えられる。

以上、本稿では、対訳・音注の配置という形式的な面について主に取りあげてきた。今後『捷解新語』を日本語史や朝鮮語史の資料として取り扱う場合、以上のような形式的な面に留意しつつ考察を行う必要があるだろう。また、他の巻と対訳・音注の配置のちがいが見られる巻四、巻六、巻十の配置例は、編集時の誤りあるいは別筆の可能性が考えられるが、これらを含め、舌内入声音の表記・音価などについてもさらに検討しなければならない。なお、音注の配置原理の詳細については、また別稿を用意していることを最後に付け加えておく。

《資料》和語における「促音、撥音、拗音」の音注配置

	改修本 巻一
促 音	いつて(1オ)、御さつて(9ウ,16オ)、まつて(11ウ)、 まいつた(11ウ)、あかつて(12オ)、もつて(13ウ,33ウ,49オ)、 御さつた(16ウ,17オ,32ウ,39ウ)、あつても(25ウ)、 ちつと(29オ)、かえつて(32オ)、おつつけ(36オ)、 ～さつしやるの形(8ウ,10オ,12オ,14オ,18ウ,28ウ,31オ,36オ,39ウ,40オ,40ウ,48ウ,50ウ)
撥 音	御さりません(13オ)
拗 音	あかれしやれませい(3ウ)、たのましやる(5ウ)、 おもわしやれう(8ウ)、やらしやれて(35オ,39オ)、 ゆかしやれい(36オ)、おかしやれませい(37ウ)、 ～さつしやるの形(8ウ,10オ,12オ,14オ,18ウ,28ウ,31オ,36オ,39ウ,40オ,41オ,48ウ,50ウ)

(下線は「ずらし音注」を示す。その他の巻の「促音、撥音、拗音」の例も巻一と同様の音注配置である)

参考文献

河野六郎(1994)「ハングルとその起源」『文字論』三省堂

辻　星児(1988)「戊辰版『改修捷解新語』の朝鮮語について－その表記・音韻を中心に－」『岡山大学文学部紀要』10、『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部1997所収

辻　星児(1997a)「『捷解新語』に見られる文法意識－対訳朝鮮語の配置を通して－」『日本語と朝鮮語(下)』国立国語研究所

辻　星児(1997b)『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部

濱田　敦(1962)「外国資料」『国語国文』31-11

濱田　敦(1970)「朝鮮資料」『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店

安田　章(1960)「重刊改修捷解新語解題」『朝鮮資料と中世国語』笠間書院1980所収（「捷解新語の改修重刊」）

安田　章(1966)「対訳」『国語国文』35-6

安田　章(1980)『朝鮮資料と中世国語』笠間書院

安田　章(1987)「捷解新語の改修本」『国語国文』56-3

調査資料

『原刊活字本　捷解新語』(1990) 弘文閣　ソウル

『重刊捷解新語』(1990) 弘文閣　ソウル

安田章、鄭光　共著(1991)『改修捷解新語』太學社　ソウル

(2001年6月28日 受理)